

RUSSIA

文／大平陽一

遙かな国、まだ見ぬ恋 フットボールと浮浪雲

「好きなクラブはどこですか」と聞かれると困ってしまう。「バルサやアーセナルの試合は眠くても見ますけど」と答えて誤魔化すしかない。しかし10年前もアーセナルが好きだった訳ではない。

私の浮気性については家内がお墨付きをくれそう。いい加減な私は自分が一途な愛に耐えられない気がする。開き直って弁解をさせてもらうなら、私たちの少年時代は海外サッカーの情報が乏しく断片的で、代表チームに傾斜しがちな情報から特定のクラブへの愛をはぐくむのは難しかった。

ソ連に至っては鉄のカーテンの向こう側。子供の頃のアイドルだったヤシンの所属クラブを知ったのが引退試合の記事だった。

それでも無理矢理に妄想をふくらませて好きになったのがウエストハムUだった。理由は単純。66年W杯優勝のイングランド代表にムーア主将、決勝でのハットトリックで歴史に名を残したハースト、そしてピーターズの3人を送り込んでいたからだ。同じチームにはマンチェスターUからも二人、ボビー・チャールトンとスタイルズが選ばれていたが、ムーアたちがいかにも若々しかったのに比べ、マンUのMFたちは禿げていた。しかし頭髪の多寡などという浅薄な理由で好き嫌いを決めた罰が当たったにちがいない、ウエストハムの降格やら経営難について心配した挙げ句、今では自分の頭髮がサー・ボ

ビーに肉薄している有り様だ。

小さな恋のメロディー

しかしどんなにハマーズが好きだからといっても、雑誌以外に情報源はないのだから、愛はしばみがちになる。今も私が応援しているのは、後年ウエストハムが育成面に定評があることを知り、ムーアの時代のグリーンウッド監督が晩年になって代表監督に就任し、どん底のイングランドを立て直して3大会ぶりのW杯出場に導いてくれたからに過ぎない。幼い愛が再燃しただけのことだ。

そんなウエストハムへの不実な愛の谷間にあたる時期に夢中になったのがボルシアMG。こちらは69年に来日していたから少しは実態があった。あの頃の日本サッカー界はクラマーさんの影響もあってドイツびいきだったが、それを割り引いてもボルシアの攻撃サッカーは十分魅力的だった。バイスバイラー監督はその指導書が日本でも出版されたほど名伯楽として評価が高く、高校時代の私は、現代国語の時間はもっぱら彼の著書『サッカーの戦術』に読みふけていたものだ。

さらば青春の光

しかしボルシアMGでさえ、『ダイヤモンドサッカー』で見ることができたのはネットジャーがリアル・マドリーに移籍した後のシモンセンやシュティーリケの時代の試合であり、7対1で大勝しながらインテルの選手が観客の投げた缶に当たって負傷したため無効とされたチャンピオンズカップの試合や、その直後にシャルケを7対0で粉砕した試合の映像は大学卒業後に市販されたビデオでようやく見ることができた。その頃すでにボルシアの黄金時代は遠い昔話になっており、まるで初恋の相手の黄ばんだ古写真を見るようなものだった。それでもかつての盲目的な愛のお陰で今でも目を細めれば胸のスポンサー名がぼやけてきて昔のユニフォームのように見えてくるが、だからといってボルシアの順位が上がるはずもない。



市之瀬敦
×
大平陽一

ヨーロッパ余談横断

ポルトガル、ロシアを専門とする二人の教師が誌面で交流学会の異端児が、ドイツ・ボランチを組む。両サイドに思いを馳せる。欧州の西と東を結ぶ橋梁に文化を絡めてサッカーを知る、月ひとコマの公開講座です。

PORTUGAL

文／市之瀬敦

ながーく愛して、かなり愛して ベンフィカ愛もはや四半世紀

なほど、大平さんのクラブ愛遍歴には登場人物が多くて圧倒させられる。なにしろ私は、まだ物心がつく前から赤いユニフォームを着せられ、父や兄に手を引かれてルース・スタジアムに足しげく通い、気がついた時には、浮気もできないくらいに熱狂的なベンフィキスタ（ベンフィカ・サポーター）になっていたのだから。「女は代えてもクラブは代えない」のがポルトガルの男だそうだが、私もクラブに関してはずっとベンフィカ一筋なのである（女性に関してはノーコメント）。

なんて言っても、ベンフィカ一筋は本当だが、好きになった経緯についてはもちろん真つ赤な嘘。私は日本で生まれ育ったいわゆる「純ジャパ」。立派に物心がついたときでも、ベンフィカの「ベ」の字も知らなかった。そんな私がベンフィカというクラブ名を知ったのはいつのことなのか。それに関しては記憶が定かではない。

ただし、1984年の「欧州選手権」（現在の「ユーロ」）の準決勝でフランスと死闘を演じたポルトガル代表メンバーの中でも特に応援したのがベンフィカ所属の選手たち（シャラーナ、カルロス・マヌエル、ペント）だったことを思い出すと、それ以前にベンフィカが好きになっていたのだと思う。おそらく、大学でポルトガル語を学び始めてから、ポルトガルサッカーの英雄はエウゼビオ、その彼が活躍したのはベンフィカという知識をどこかで得ていたのだろう。

落ち目のベンフィカを愛した私

84年秋、リスボンに暮らし始めた私は、すぐにベンフィカのゲームをスタジアムで観戦するようになった。稀代のテクニシャンだったシャラーナはすでにフランスのボルドーに移籍していたが、カルロス・マヌエル、ペント、ディアマンティーノといった代表組はまだクラブに残っていた。

残念ながら私が出会ったベンフィカは、ポルトの躍進の前にそろそろ衰退のサイクルに入ろうとしていた。ハンガリーの名将バル・チェルナイやイングランドのジョン・



Photo: Liverpool FC via Getty Images

今季EL準々決勝でホームにリバプールを迎えたベンフィキスタたち。リバプールのサポーターが「ユニー・ウィル・ネバー・ウォーク・アローン」と歌うなら、彼らは「ソー・ベンフィカ」と歌う。「俺はベンフィカ」。クラブと一体化しサポートする。どんなに負けても心は変わらない。

モーティマーという監督のチームにつきあったが、守備的なサッカーがつまらなだけでなく、なにしろ勝てなくなっていた。私のベンフィカ愛も今では四半世紀を超えているが、その間にリーグ優勝は5回しかないのである。これでは名門ベンフィカも、強豪と言うよりは古豪としか呼べないではないか。

しかし、どんなに負けよう、勝てなくても私のベンフィキズモ（ベンフィカ愛）は変わらない。遍歴というよりは偏愛だ。私はベンフィカのサッカーよりはベンフィカというクラブを愛してしまっただのかもしれない。サッカーよりもクラブを愛してしまうのはポルトガル人の悪い癖でもあるが、私もけっこうポルトガル的な人間のようなのである。

国滅びようともベンフィカは不滅！

先月18日の対アカデミカ戦で勝利した後、リーグ優勝の祝賀パレードを見越し、リスボンの中心に位置するボンバル侯爵の巨大な像に「予約済み」という大きな横断幕を掲げたサポーターがいた。そのユーモアのセンスと創造性も心強い限り。米国の著名な経済学者スティグリッツ教授が最近ギリシャに次ぐポルトガルの国家破産の可能性を指摘したそうだが、たとえそうなってもベンフィカは滅びないとさえ思ってしまうのである。

Photo: Yoichi Ohira



津高校サッカー部の仲間たち。メキシコ五輪以来、いわゆる「氷河期」でさえ揺らくことのなかった日本代表に対する愛が風前の灯になった今、我われに残された永遠の愛は生涯の友と出会った母校への思いだけなのだろうか。



市之瀬敦（いちのせ・あつし）

上智大学外国語学部ポルトガル語学科教授。東京外大ポルトガル語学科卒業。リスボン大学留学後は、何があってもポルトガル代表とベンフィカを愛し続けている。専攻語学は違っても大学、大学院では大平さんの後輩に当たる。雑誌上とはいえ、サッカーが縁で「再会」できて光栄です。

16時限目 欧州逍遥と不滅の愛

フットボールを愛する人の数だけ存在するマイ・クラブ。
ある者は奔放な遍歴を重ね、またある者は一途な愛に身を捧ぐ。
昔話と笑うなかれ。海の向こうへ胸焦がす気持ちは今も昔も不変です。
あなたの居場所（クラブ）はどこですか？



大平陽一（おおひら・よういち）

私が授業をサポートして大学院生控室のテレビでW杯を見ていた頃、後輩の市之瀬さんは「カムアウト」していなかった。だから「ポルトガルサッカー物語」を本屋で見た時は驚いた。そして読んで感心し、自分の小冊子にも似た題をつけてしまった。天理大学でロシア文化を教えます。